国民・国家・食

人間生活において「食以上に基礎的なものは存在しない」。『食』（2008）の冒頭でこう断言したのは食文化研究家Warren Belascoである。なるほど食は個人の身体のみならず国体の基礎であり、また国家と社会、個人と集団のアイデンティティの基礎である。資源としても、アイデンティティーやハビトゥスの象徴としても、食は個人・集団を引き寄せたり、引き裂いたりもする。「同じ釜の飯を食う」のは、家族や友人の絆を深め、信頼を強化する。一方、階級や民族、ジェンダーなど、様々な差異を刻印する。食は、遍在的かつ普遍的であり、美学から戦争まで、人間のあらゆる営みに影響を及ぼしてきた。

しかしBelascoは、食文化研究について、世界的にみて、文化人類学などに包摂された研究を除き、近年まで学者に敬遠されがちで、比較的新しく独立して発展してきた研究分野であるとも指摘する。日本の食文化研究の権威といえる江原絢子は、国内では戦前には、上流階層の食生活史が歴史学的視点から、民衆の食生活が民俗学的視点から、それぞれ研究されたとしつつも、「食文化」という言葉自体が一般化したのは1960年代以降であるという事実を鑑み、やはり「食文化研究は、比較的新しい領域」であると述べている。その結論はやはりBelascoと重なる。

これほど重要な研究テーマが最近まで疎かにされたことは不思議である。

しかしながらそれは、ありがたいことでもある。なぜなら、未開拓の課題が山積し、研究の可能性が無限大にあるからだ。

このような認識のもと、2019年1月、超域文化社会センターでは、国内外の幅広い研究領域の研究者の研究成果を収集し、食文化研究の多様性や重要性を訴え、食文化研究を通じて新たな知識を創造し、人間および人間社会に対する理解を深めることを目的として、国際シンポジウム「国民・国家・食」を開催した。

本特集は、シンポジウムの成果をベースに、食と帝国主義、ジェンダー、外交、「在日」文学などを対象とした5つの論考を収めたものである。内容を簡単に紹介しておく。曾品滄と陳玉箴は共著で、20世紀初頭を中心に、台湾のレシピ本（「菜譜」）の内容や性格の分析を通して「台湾料理」の確立や変化を読み解く。河西英通は、昭和初期の東北凶作・飢饉は帝国主義的「凶策」に起因するにもかかわらず「後進地域」東北特有の問題と誤認され食糧政策が見直されなかったという過ちと、糧などの資源を求めるアジア侵略の関連性を指摘する。ネイスン・ホプソンは、1956～60年、アメリカ農務省の資金で運営され日本中を駆け回った栄養指導（キッチンカー）車や米国産余剰農産物による日本人の食生活への影響を考察する。ヒラリー・マクソンは、家計管理が女性の役割となり、家計簿が近代的な「主婦」の象徴となったと指摘する一方、家計簿の食費の記述方法・表現に着目して食に対する意識の変化を見出す。そして最後に、岩田クリスティーナは、在日詩人たちによる食の表象を抽出し、揺れ動くアイデンティティーの表現として再考する。

これらの論考を通して、食文化研究のさらなる可能性、とくに時代・地域・学術的領域を超える「超域生」を追求していきたい。（ネイスン・ホプソン）

参考文献
Belasco, Warren James. *Food: The Key Concepts*. Berg, 2008.
江原絢子「食文化の研究方法について（その1）」『日本調理科学会誌』31巻2号（1998年5月）：161–165。